永遠の処女

中村真一郎

新潮社版

永遠の処女

一九八三年六月一〇日印刷
一九八三年六月一五日発行
著者 中村真一郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話 業務部(03)二六六-五一一一
編集部(03)二六六-五四一一
振替東京四-八〇八
印刷 株式会社金羊社
植木製本株式会社
定価一三〇〇円

© 1983 Shin'ichiro Nakamura
Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-315508-6 C0093

中村真一郎作品集目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三つの曲の時間……7
思想と愛欲……27
都市の迷路……57
人形の恋……75
仙界逍遙……103
陶磁の夢……133
遺跡訪問……153
永遠の処女……171
奏楽する天女たち……209
みやこに鄙に……223
あとがき 245

装画　蓮池純治

中村真一郎

永遠の処女

三つの曲の時間

或いは記憶の領域

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その日は一日中、彼は記憶に祟られていた。朝起きてから夜眠るまで、深く暗い記憶の森のなかを、徨いつづけることになったのである……

毎朝の習慣で――といっても、これは数年まえの大病以来はじまった新しい習慣なのだが――眼が開くと先ず、ベッドのなかで印刷インクの匂いの鼻先に拡がるのを嗅ぎながら、カサカサという音をたてて、その日の朝刊を開ける。そして、まず社会面の下段の死亡記事の部分に目を走らせる。六十歳を過ぎた彼には、死は遠い他人のことではなく、もう頭上近くに迫って来ていて、いつ何時、まっすぐに落ちかかってくるかも判らない。それは彼の青年時代の空襲の経験に似ていて、この頃はほとんど連日、ばらばらと前後左右の人間が倒れて行く感じなのである。現に昨日も、去年の暮に急死した古い友人の通夜の席で、死に関する際どい冗談を云っていた有名な映画プロデューサーが世を去ったのが報じられた。冗談というのは、その古参の映画人は、やはり彼のように毎朝、床のなかで新聞の死亡記事に目を走らせ、自分の死亡が報じられていないと、

ようやく今日も未だ生きているのだと確認して起き上る、というので、彼は傍らから、「しかし新聞は誤報も多いし、報道洩れということもありますからねえ……」と、からかいながら、長いきびしい歳月を生きてきた、その強情そうな頭髪へ目をやって、そして心の奥に冷やかな風が吹き起るのを感じていた。おれもこの男と同じ不安に捉えられながら、同じ習慣を繰りかえすようになっている。そうだ、朝、新聞を鼻先に拡げる瞬間のおれは、この男と同じように、自分の死の痕跡を探し求めていたんじゃあないか。しかし滅多な冗談を云うものじゃない。とうとうあの男本人の死亡記事が出てしまった。あの筋骨たくましい大男は、今頃、床のなかで新聞を拡げて、しまった！　と叫んでいるだろう。と、そう一瞬想像したあとで、彼は自分の思い付きのグロテスクなのに、慄然となった。それから、今ここで新聞に顔を埋めて、そんなあり得ぬ妄想の餌食になりかけたおれ自身の方こそ、果してまだこの世に生きているのだろうか、と途方もない疑問が、頭を擡げだす気配を感じると、（実際、そんな空想は、死んだ脳のなかにこそ生まれるにふさわしいものなんだろうから）大急ぎで毛布を蹴落して床から遁れ出たものだった。その生暖かい寝床が、臨終の舞台に錯覚され、どうやら顔のまえを鋭い線香の匂いが吹き過ぎて行くのを、ありありと嗅いでしまったのだから。

その昨日の今日なのである。悪い予感のなかで、思いきってぱっと新聞を開いた。そして眼が直ちにひとりの写りの悪い老婦人の顔写真に行った。見たことのある顔、いや、恐らくは自分の遠い知人の母親ででもあろうか。記憶の奥の方で、その写真顔と微かに似た面影が眼覚めはじめるのを意識してきたのだから。いや、似たというのではない、それは正反対かも知れないのだが、何処かに一族らしい特徴が漂っているのだ。そうした男か女かが、思い出されようとして、彼の

意識の敷居の直ぐそばまで近寄って来た気配がする。ところでその新しい死者はある華道の流派の家元だそうだ。そして、彼の目がその記事を走り読みして行くと、忽ち数行先で釘付けになってしまった。戦争直後、この生花の師匠は新進詩人として活躍した、とある。その筆名が眼に飛びこんできた途端、彼は何とも奇妙な近代的な音楽の渦のなかに、自分が引きこまれて行くのを感じはじめた。その曲は過去の時間のなかから、明るく悪戯っぽくて、赤ん坊の笑い声のように生暖かく、寝室の仄暗い空気のなかを弾けながら流れ出てきて、一気に彼を時間の外へ連れ出したのだ。

そうだ、それは「梨の形をした三つの小品」という奇抜な表題を持つ曲なのだ。そしてその曲のなかから、宝塚の男役のようだ、と彼がその時、咄嗟に思った、男の背広に似た白い服の胸をふくらませた女が、色っぽい笑いを眼もとに滲ませて、誘惑的な頸の曲げ方で彼を見返している。その時間の真中に、曲の氾濫によって巻きこまれた彼には、眼のしたの新聞の和服姿の老婦人が、妙に色あせた遠い時の彼方の人のように感じられる。もうずっと以前からあの世に行っていて、死というものに慣れきった人間のような顔なのだ。そして今、カーテンを閉めたままの寝室の薄闇のなかを、そこだけを眩しいような白い光りを集中させて、その中心に浮び出ている若い白服の女の上半身は、それこそ、生命に溢れてここに生きている。そうして幻影の若い女と写真顔の老婆とは、一族とか親子とかいうのでなく、新聞記事によれば正に同一人物で、そして若い女の方が三十年前の存在であり、老婆の方が最近の姿だということになる。となると、まるでこの女は彼の記憶のなかで、人生を逆に生きて来た感じになるし、そうして今、床のうえに半身を起して、胸のうえに新聞を拡げている彼は、まぎれもなく朝起きた時から息切れのする、使い古した

六十歳の心臓の所有者なのだから、彼とこの女とは、人生のエスカレーターの昇りと降りとに別別に乗っていて、この近代的な曲のなかで、丁度、すれ違ったということになる。

ところで、そのすれ違った瞬間というのは、おれの人生のどの段階のあたりだったか。おれは突然に生まなましい幻聴によって、現在唯今、その音楽のなかに包まれているが、実際はこの曲はある過去の一瞬の記憶の復活なのだ。——と、そこまで考えが及んだ時、彼は急に自分のまえに長いトンネルが生れて、その闇の穴の向うの、小さな明るい光の氾濫のなかに、そのピアノ曲が遠ざかって行くのを感じた。ああ、あれは今からもう三十年もの昔で、そうしておれは毎朝、新聞を開けて真先にラジオの番組に目をやったのだ。(死亡記事なんて、あの頃は気がつきもしなかった。時々は自殺したくなったりした癖に……)それは毎朝、ある局で音楽のリクエスト番組というのがあり、そこで招ばれた出演者が自分の好きな曲を流してもらいながら、その曲にまつわる思い出を語るという時間で、多分、はじめてラジオというものに出演した彼は、自分の声を聞かれるということに好奇心を起して、今朝こそは自分の名が番組に出ていないかと、待ち兼ねて確かめようとしたのだった。局の方では、放送が近付きましたらお知らせします、何しろ、もう数十本、とり溜めましたので、仲々順番が廻って来ないと思いますが、と云っていたが、もう翌日から、万一ということもあろうかと、彼は毎朝、欠かさず新聞を開いた。そうして、その内に自分の名には出会わなくても、知っている人間の名に次つぎと遭遇して、ついスイッチを入れることが多くなった。そのひとりで、彼が愕然となったのが、その暫く前に或る出版社で出会って紹介された、三十歳近くにもなろうか、成熟したはっとするような色白の美貌の、売出し中の女流詩人だった。彼女は初対面で妙に艶然すぎる笑みを浮べて彼を凝視し、そして「戦争の直

ぐ前に、日比谷公会堂でお目にかかりましたわねえ……」と云われた。あそこはその頃、たしかよく新劇の公演が行われていたので、廊下の雑踏のなかでこの女性と挨拶ぐらい交したのかも知れないが、目の前の眩しいような白い生地の服のなかに、十年近い前の少女の姿を想像することは全く不可能だったので、生返事をして別れたが……しかし、その朝の番組に彼女の名を発見して、直ぐ枕もとのラジオのスイッチを入れたのは、あの数日前の女の、明らかに征服的意図をもって作られたと思われる濃厚な微笑の後遺症だったのだろう。

そうして、いきなり受信機のなかから流れ出て来たのが、この「梨の形をした三つの小品」だったのである。それから彼女は、それが癖の妙に人を苛立せるような、ゆっくりとした口調で、その曲をはじめて聴いた日比谷公会堂での音楽会の雰囲気、戦争勃発直前の暗鬱な空気のなかで、そこだけが人生の快楽を一個所に集めたような、華かな若い男女の醸し出していた熱気の思い出について語りはじめた。そして、「その後はもうモンペでしか外出できなくなりましたので、それが私の最後のお振袖の姿でした……」というところまで話が進んだ時、不意に彼の眼のまえに、その振袖姿の少女が浮び出てきた。それは目を射るような鮮かな出現だった。そうだったのか、あの時、通路をはさんで坐っていた娘が、あの白服の女性に成長したのだ。彼自身、まだ二十歳をいくらも出ていなくて、大学卒業の前後の筈だった。そしてあの娘は確か女子大に入ったとか入るつもりだとか云っていて、それが友人の妹と女学校の同級生とかで、丁度、その音楽会へ来ていたその友人兄妹から彼は紹介されたのだった。現在の彼女が詩を書いているというので、戦前の公会堂での催しを芝居だとばかり思いこんでいたとは……

そう云えば、その時、随分おしとやかな娘だ、と彼が小声で感想をのべると、友人は「何でも

有名な生花の家元の娘だそうだ」と耳うちしてくれたっけ。——と、この耳うちを思いだしたのは、七十年代も末の、老いたる彼の脳髄で、そうして今、もう一度、これほど心を揺るように聞えだして来たフランス近代のピアノ曲の、この音の深い響きは、一体、あの戦後間もなくのラジオから流れでて来た音楽の記憶なのか、それともそれよりももうひと昔前の、戦前の音楽会での生演奏の記憶の甦りなのか。そう言えば、あの華かな振袖姿で、彼に向って日本舞踊でも踊っているように、柔かに上半身を傾けてお辞儀をしたあの瞬間の少女の面影は、その身振りの瞬間から直接に四十年の歳月を飛び越して、新聞をのぞきこんでいる老人の彼の脳裡に送られてきたのか。それとも、一度、すっかり忘れられていた情景が、その十年近い後でこの曲をラジオで耳にした瞬間に、思いがけなく立ち返って来て、それがまたそのまま彼の意識の底で眠りについていたのが、今朝のこの死亡記事によって、二度目に生き返ったのか。その優雅な昔の日本の少女の面影は、だから「記憶の記憶」なのではないのか。

彼は自分の過去の入り組んだ小路のなかへ、複雑に迷い入って行くのを意識しながら、暫く茫然として、その少女の生れ変りの白服の若い婦人の、またそのなれの果てである、堂々たる華道教授の顔写真のうえに視線をさまよわせていた。

ところで、その日、ある新聞社のビルの地下で、おそい昼食代りのラーメンをすすりながら、彼は今朝味った、脳のひっくり返りそうな奇妙な経験、その「記憶の記憶」の回復の現象について、また何度目かの感慨に耽っていた。もし今から三十年前のある朝ラジオを聴かなかったら、あの振袖の娘は永久に記憶の底に埋没していた筈なので、彼の意識はあの朝、その少女の面影を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com